2020.11 no.88

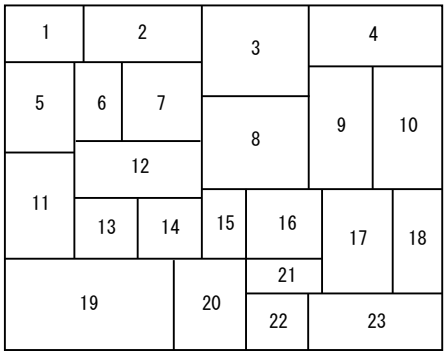
aaca

一般社団法人 日本建築美術工芸協会

第５回 街に飛び出す作品展

表紙解説

第５回 街に飛び出す作品展　推薦作品



1. 井上勝江
想　6（ソウ　6）
越前和紙
w900×h600

2. PHIL UHL（フィル ユール）
RACE DAY（レース　デイ）
デジタルペインテイングonキャンバス
w1520×h760

3. 神　芳子
Fennec（フェネック）
籐の皮
w2500×h1600×d600

4. 高部多恵子
游　15ー1
版画・紙
w1100×h500×d30

5. 品川未知子
誕生Ⅵ…巨樹（キョジュ）
日本刺繍
w1150×h1500

6. 鈴鹿しげみ
a SUN Ⅱ（ある太陽Ⅱ）
ガラス
w310×h700×d310

7. 山崎和子
Square on Time A
染色（布）
w800×h800

8. 山崎輝子
Seedsー慈雨をまって
皮革
w1120×h950×d50

9. 小泉伸子
結（むすぶ）
木・紙ねんど・綿糸
w600×h600×d150×2

10. 五十嵐通代
明け方の夢2017
絹糸・綿糸・ステンレス線
w750×h1900×d200

11. 白野順子
サンサーラ・自然の魅惑
染織
w640×h940

12. 野口真理
たねから土へ
陶土・粉漆・金属箔等
w200～470×h300～
680×d150～240

13. 渡辺雅夫
COLLECTION A
ウォルナット・漆喰
w910×h910×d60

14. 二木啓子
夜が明けたら
陶
w680×h380×d320

15. 須齋尚子
浄ー光の行方ー
（キヨラ　ヒカリノ ユクエ）
陶土
w230×h470×d210

16. 堤　一彦
ON THE EARTH
（オンザアース）
マケドニア 白大理石 マケット展示
w950×h700×d650

17. 中野恵美子
結び文字ーⅤ
綿・麻（技 法:ジャカード織（手織））
w1060 ×h1630

18. 上江州牧子
時の移ろい
ガラス・鉛材
w2400×h500
（600×500 パネル4枚）

19. 加藤恵利
Bloomー芽吹くー
（ブルーム メブク）
金属（木製原寸マケット展示）
w1300×h1000×d1300
w1000×h700×d1000
w800×h550×d800

20. 信ヶ原良和
森とおおたか
ステンレス・鉄
w500×h600×d500

21. 安部大雅
起伏するかたち
御影石・木
w1100 × h700× d140

22. 池田嘉文
エンドレス　ドリーム
強化プラスチック・鉄・ステンレス
w1670×h1550×d800

23. 石井　春
無題
タイル・木
w1800×h600

“街なかミュゼ活動”は建築・都市空間に美術・工芸などの造形作品を取り入れ、人間性豊かな環境づくりを推し進める試みで、日本建築美術工芸協会が取り組む活動としてますます広がりを見せて展開しています。

「第５回 街に飛び出す作品展」では、給田４丁目プロジェクト・湯島３丁目計画・河合様おおたかの森計画・石村様おおたかの森計画・中町１丁目計画木村様・やつやエステート計画　のスターツ CAM（株）が建設した６プロジェクトに 63 作品の応募がありました。平成 30 年 10 月 18 日～ 25 日まで建築会館ギャラリーにて「第５回街に飛び出す作品展」として展覧会を開催しました。

南三一郎推薦委員会委員長（建築家）による推薦選考では、選考委員があらかじめ各プロジェクトに作品を推薦し、展覧会会期中、推薦コメントを参考に設計担当者のアドバイスの中で、オーナー様に作品をじっくり検討していただきました。レセプションパーティで岡本賢会長の挨拶、オーナー様、スターツ CAM（株）取締役設計本部長千坂真吾様、取締役営業本部長大滝典之様、aaca 推薦選考委員長南三一郎、選考委員の紹介があり、選考された作品 23 点を発表しました。選出された作家に、aaca 推薦状が手渡されました。

実行委員長　安河内敦子

CONTENTS

■時代の華一輪

美しい国に暮らしたい　横河　健　4

■会員活動レポート

2019 年ウイーンでの個展
「日本、オーストラリア国交 150 周年記念イベント」
小泉伸子　6

焼き物・景観・未来　日東英成　7

仕事と人との出会い　三原　等　8

ー Layer ー 繊維が描く綿による平面絵画　線　幸子　9

ご挨拶に代えて　酒匂克之　10

ノグチミエコ展示会レポート
自粛明けの東京で個展を開催して
「MIEKO NOGUCHI 錬金術師の部屋」　ノグチミエコ　11

■新規入会法人会員のご紹介

リリカラ株式会社　中澤　淳　12

株式会社ウォーターデザイン　山本　誠　13

東洋アルミニウム株式会社　髙根喜一郎　14

株式会社遠藤照明　遠藤邦彦　15

■連載（4 回連載）

藤井厚二と木造モダニズム建築「聴竹居」(1)　松隈　章　16

■法人会員の設計事務所を訪ねて

株式会社久米設計 Part 2
丘の上のスタジアム（栃木県総合運動公園陸上競技場）
広報委員会　18

■母校を訪ねて

早稲田大学　川瀬俊二　20

■会員増強委員会だより

第 2 回 aaca サロンの開催報告
『都市の関係性にはたらきかける“もの”』
須田武憲（GK 設計）、齊木慶一（スペース・メニュー・ラボ）
両氏をお迎えして
石原智也　22

■事務局だより　24

▶▶ 11

▶▶ 16

▶▶ 18

▶▶ 20

▶▶ 22

美しい国に暮らしたい

建築家
日本建築美術工芸協会会員
横河　健

私はいつから「建築」を目指したのだろうか…?

時々このような疑問が頭の中をかすめる時がある、建築はいつ始まっていつ終わるのだろうか?…とも。私の祖父が建築家だったと気付いたのもだいぶ大きくなってからだし、親からも建築家になれ!などとは一言も言われたこともない。ただ父からは「好きなことをやりなさい」と言われていた、しかしこれは放任主義ということではなくて、つまりは好きこそ物の上手なれ…という意味ではなかったかと思う。

算数・国語・理科・社会…これは小学校の主要科目というやつだ。思い返せばこの主要科目というやつは全くダメだった。好きだったのはスポーツつまり体育、あとは美術・工作・音楽・家庭科・習字といったものだった。前者の主要科目というやつは（算数を除けば）皆記憶ごっこだから、ただ何も考えず、記憶力のいい奴が成績がいいのだ。僕はもともと記憶の回路が断絶しているので、勢い成績もいいはずがないのである。反面確かに小さい時からモノづくりが好きだったし、モノづくりで大人を驚かせるのが楽しくてしょうがなかった。そんな幼少期つまり戦後間もない頃だったからしょうがないのだろう…商店街の前にはドブ川に木の蓋がしてあるだけだから臭いし、汚い街だな～？と…なんとなくではあるが、いつになったら美しい街になるのだろうか？と思っていたものだ。ハッキリと憶えているのは父親が持っていたゼンザブロニカとというカメラを勝手に拝借してその商店街を撮った記憶がある…昭和35年頃だろうか？小学校の子供ではあるけれど、写真を撮りながら街が汚いのをなんとかしたい、なんとかしなくては…と思っていたのです。

この頃から我が国・日本は高度成長期に入って行ったと思うのだが、世の中ではテレビ・冷蔵庫・洗濯機といった家電が飛ぶように売れ、物を買えば豊かな生活ができる…と思っていた時代なのです。確かに収入は増え、主婦の家事は楽にはなったのだろうし、見かけの、つまり物品の購買意欲からGDPの数字は跳ね上がって行ったのでしょう。しかし、僕の夢見ていた美しい街はなかなか実現して行かなかった。電線電信柱は縦横無尽に…それは悲しいかな今なお変わらないし、小割りの極小敷地を統合することもなく、相続税対策とかで本来作りたくもないペンシルビルに建て替えを余儀なくされて、無作為に情けない新築ビルが立ち並ぶようになってしまったのである。子供の時に思ったこと…つまり何年か経てば（もういくつ寝ると）美しい街並みに生まれ変わるに違いない、と思っていたことは見事に裏切られたと言うわけです。<①>

さて、どうやって建築の道に近づいたか?…の話をしても良いのですが長くなりそうなので、割愛しても良いのかな？と思いますが、そもそも私は理工学部系の建築学科を出てるわけではなくて、美大のグラフィック、写真、インテリア、インダストリアル…などから本当に少しづつ建築に近づいて行ったと言うか、純粋な建築に対しては、神の教えに近づくが如く…有名・無名の実際の建築空間とそれらを起こした社会（市民）とを直かに学んでいくことしかできなかったのです。<②>

ところで、ご存知の方も多いかと思いますが、私の大好きなTV番組で（BS.日テレ）イタリアの片田舎の村を取材している番組があるのですが、有名でも何でもない普通の暮らしをしている家族（毎回二組の夫婦）を通して人生の浮き沈みを淡々と語ったり、同時に今の幸せが何か？近くに住む子供達が昼時になると集まってただ昼食をとったりしているだけなのですが、それはそれは美しい暮らしと共に生きる人々の取材なのです。僕は毎週日曜日の朝、ゆっくりと朝食、時には朝・昼兼用のブランチをしながら（BS.

①我が国の悲しい商店街

②エジプトの旅

③イタリアの小さな村・BS日テレ

日テレ 10:00 ～）時に目頭を熱くさせながら見ているのですが…なんでこんなになんでもない暮らし（金銭的には必ずしも豊かでもない）が豊かで幸せそうなのだろう…反面、私たちの国は？と考えてしまうのです。<③>

誰もが一度くらい海外に出られたことがあると思うのですが…私も仕事や観光・時には学生など大勢を引き連れての建築研修旅行や、建築家の仲間と歴史的建築家の仕事を中心に見て回る建築行脚を繰り返してきました。<④>例えば A. パラーディオ、F.LL. ライト、L. コルビジェ、L.I. カーン、A. シザ…などなどの作品であるけれども、なぜわざわざ旅をして見にいくのかといえば…ご存知の通り作品そのものの興味もさることながら、作品たちがどういった街にあってどのように成立してきたか？と言うことを肌で感じること、つまり建築とは街とともに生まれ、歴史を刻んでいるのですから、その事実をこの目と肌で確認することなのです。その意味では旅先での食事の場面も大切です…美味しいものを食べる喜びは何ものにも変えがたい至福のときと言えるかもしれません。しかし美味しいね～とお腹ポンポンと叩くだけではありません。この町の人々はどのような暮らしをしているか、つまりどのような町のどのような店では、どのような人たちが何を楽しんでいるか？つまり食材の季節感もさることながら、どのようなインテリア空間をどんなレベルの人たちが楽しむのか？夫婦か？仕事仲間か？恋人か？着ているもの、食事の仕方まで観察の対象になります。<⑤>ですから私はあるとき重要なことに気がつきました…それは海外で美味しいものを食べたいと思うときはガイドブックに載っているような世界的に有名な店を探すのではなくて、地元のお金持ちが行く店の紹介を受けるのです。もちろん有名な店はそこそこ素敵で美味しいのでしょうが、余計なお金がかかることも多いので困りものです。しかし地元のお金持ちの行く店というのは美味しさについても季節感も間違いがないだけでなく、料金も観光客値段ではないし、何よりもその町の文化レベルが分かるというものだからです。そしていつも思うのですが、ヨーロッパのどの国のどんな都市、いや街や村でも美しいと感じるのは私だけでしょうか？西欧、東欧、北欧であろうが、また何も観光地的に整っていなくても、否、むしろ先ほどの TV. 番組「イタリアの小さな村」ではないけれど、名も無い小さな街や仮に裏道に迷い込んでもその印象は変わりません。ヨーロッパだからでしょうか？否、トルコ、中近東、アジアにしても私達より数段歴史風土を大切にしているように思えます。私たちの国はいつから建築・都市景観が貧しくなったのでしょう?、オフィスや商業都市ではなく、人の住むところの美しさを何故失っていったのでしょうか?…そこにはここで書ききれない程の理由があるとは思いますが、やはり戦争に負け、戦後の復興にかけたことと、遠い将来の夢を構築することのギャップについていけなかったのでしょうね？しかしいつまで経っても目先の政策しかしていないように思うのは私だけでしょうか?GDP が世界第２位になった（いまや転落）と喜んだり世界からおだてられて、ODA だ何だとお金をばらまいてきた割に、振り返れば我が身の恥ずかしさにようやく気がついてきたというところではないでしょうか？<①、⑥>

このようなことをあらゆる機会を見つけて問題提起をしてきましたが、ここの建築美術工芸協会ほどの有力者の方々が集まる組織は他にないと思われるのです。また建築美術・工芸とは美しさを希求することを目的としてきたのではなかったのでしょうか？もしそうだとすれば私たちの国が私たちが外国に行って美しさを享受するが如く、美しさを提供できる立場になりたいと思うのです。ご一緒に協力してお国（政治家・行政）には補助金をねだるのではなく、美しさのための制度づくりを働き掛けていきたいと思います。

④旅・カップマルタン

⑤パリのレストラン

⑥南仏・サンポール・ド・バンス

会員活動レポート

2019年ウィーンでの個展

「日本、オーストラリア国交150周年記念イベント」

染織造形作家
日本建築美術工芸協会会員
小泉伸子

ウィーンのお話を頂いたのは、今から1年半くらい前に、現代美術家の浜田真理氏からでした。浜田氏には、私が20代の頃から個人的に基礎美術やデザインをご指導いただいていたため、とても嬉しく思いました。

今回の個展は、浜田氏に加え、ファイバーアーティストの永井ひとみ氏、そして私の作家3名でウィーンの日本大使館内の各部屋を借り、11月25日～12月6日まで開催しました。

今回の旅は、ウィーン在住のコーディネータの林原さんを中心とし、私たちアートグループ作家3名＋家族3名、美容・着付グループ12名、篠笛グループ10名の合計28名の団体で、羽田空港からANAの直行便に乗り、約10時間でウィーン国際空港に到着しました。到着したのが現地時間ではまだ早朝であり、そのままホテルへ荷物を置いてから朝食を済ませ、すぐに作品を持って会場である日本大使館へ行き、個展の準備に取り掛かりました。

大使館のセキュリティは厳重で、空港の保安検査場と同様に手荷物をコンベアーに置いて中身を検査され、不審物が無いかのチェックを受けると同時に、人間もゲートをくぐる必要がありました。私の手荷物の際にブザーが鳴り、中身を開くと飾り付けを行うためのハサミが入っていたのです。警備員がハサミを取り上げましたが、これが無いと仕事にならないこと、翌日のワークショップでも使用することを説明したところ、警備員がどこかへ連絡し、返却してもらえました。

夕方の5時から会場にてオープニングセレモニーがあるため、私はここまで作品を手荷物で持って来てくれた姉2人と共に、ミニアチュール作品10点を銀板に乗せ、また、銀糸で編んだスプラングという技法のタペストリー1点を朱布の上に張って、展示しました。1時半には、各作家も準備が終わり、それからはオープニングセレモニーの準備や各グループでの催し物のリハーサルをしていました。5時になり、会場がオープンするや、続々とお客様が入り、あっという間に100人近くになりました。はじめに、大使館文化センターの館長さんのドイツ語によるごあいさつ、続いて浜田氏のあいさつ、そのあとは永井氏、小泉の順であいさつしました。

篠笛の演奏が数曲、続いて着物のショーがあり、皆様と作品を見ながら、通訳を交えて歓談をしました。楽しく有意義な交流ができました。

次の日は、永井氏と小泉の2名によるワークショップを行いました。開催に先だち、日本大使館の方で定員10名で募集いただいており、午前は永井氏による手織りのイヤリング造り、午後は小泉によるラッピングによるピンバッジ造りを行いました。

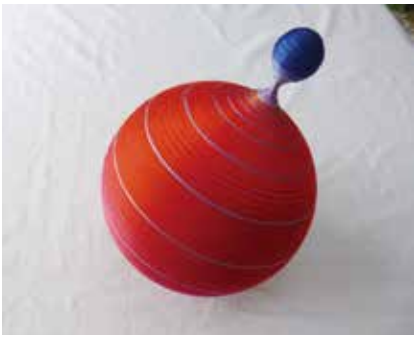
どちらも好評で定員を超える12名の方にご参加いただきました。通訳の方も同席いただきましたが、ワークショップが始まると皆熱心に、そして楽しそうに製作され、お国柄独特の糸を選ばれ、「これはどうするのか?」「どうやればいいのか?」とドイツ語で聞かれましたが、こちらもすぐにわかり、日本語で答える、そうすると、相手の方も了解という具合にニッコリと頷くのでした。物を作るのが好きな人間には、言語はあまり関係ないのだと実感しました。2個作る方も大勢いて、最後は大満足といった様子で作ったものを着けて、写真を撮り、ハグをしました。楽しく素敵な出会いでした。

その後、オープニングセレモニーで仲良くなったウィーンで画家をしているシルヴィア・グエノヴァさんのアトリエにご招待いただき、私たち作家で訪問させて頂きました。

ウィーンでの個展を通じて、世界の方々との交流は、私にとって何にも代え難い宝になりました。今後も、広い視野を持って、世界を見据えて大きく躍進していきたいと思います。

Planet

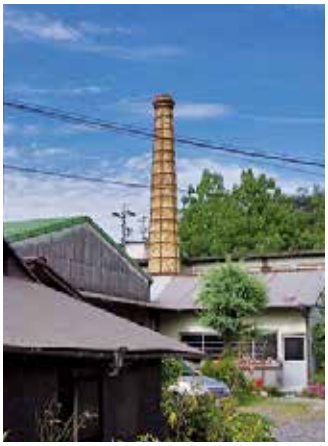
Prominene Ⅱ



Wormhole

焼き物・景観・未来

株式会社ニットー　代表取締役
日本建築美術工芸協会会員
日東英成



市内には煙突のある風景が広がる。

モザイクタイルミュージアム（多治見市）

岐阜県東濃エリア一体は陶磁器産業の集積地となっています。古くより土岐市、多治見市は美濃焼の産地として今でも町のあちこちに煙突のある風景を見ることができます。2016 年 6 月にに完成した「モザイクタイルミュージアム」は建築家藤森照信氏の設計で地元業界の熱望により完成した多治見市の人気スポットになっています。外観はタイル原料の採土場をイメージしており、内部にはモザイクタイル博物館やタイルのショールーム、参加型のワークショップコーナーなどがあります。週末には多くの家族連れや観光客、デザインを勉強する学生さんらで賑わいます。

弊社は 1964 年創業のタイルメーカーで、戸建住宅向けタイルから公共ランドスケープ向けまで幅広くタイルを取り扱っております。タイルは化学変化に強く、耐久性が高いことから住宅や街並みにも欠かせない建築材料となっています。

戸建住宅ではより快適に住みたいことからエクステリアの需要が高まっており、アウトドアリビングとして外部空間を積極的に取り込む住まい方が増えています。また近年イタリアを中心としたインクジェット式タイルの解像度が高く戸建住宅の景観をさらに高めています。弊社もここ数年輸入タイルに注力しております。

一方、公共ランドスケープでは弊社は草分け的な位置づけで、国産床用タイルを全国に販売し、公共景観に関わっています。「景観」分野は道路からの見え方から土木工学がスタートし、今は歴史や地域との繋がり、住民との合意形成など非常に複雑化しています。弊社の取り扱う床用タイルは、橋梁やペデストリアンデッキ（歩行者専用橋梁）の採用が中心となっており、最終的な色や素材が決まるまでには数年かかることもあります。

地元土岐市妻木町ゆかりの清和源氏妻木氏の末裔である妻木頼黄（よりなか）の設計した日本橋。妻木氏は幕末に旗本の長男として生まれ、官庁建築、横浜赤レンガ倉庫、半田赤レンガ建物、横浜正金銀行本店など多数の設計に携わった。明智光秀の妻煕子は妻木家の出身と言われている。

東京駅からも近い日本橋川にかかる「竜閑さくら橋」が完成しタイルを納品させていただきました。日本橋は地元の縁もあり時代を越えて景観分野に関われることに感謝しております。

弊社では「美しい景観の創造」をテーマにこれからも「焼き物」を通じて貢献していきたいと考えております。また地元有志メンバーにて「陶都街並探偵団」を結成し、年に数回地元中心に街歩きを企画し、街の魅力発見を楽しんでいます。

個人住宅

個人住宅

個人住宅

武蔵野の森競技場デッキ

渋谷駅東口デッキ

竜閑さくら橋（日本橋川）

仕事と人との出会い

版画作家・イラストレーター
日本建築美術工芸協会会員
三原　等

美術学生時代は何事にも熱心でなく、劣等生の類だったのですが、たまたま同期の友人が働いていた石版画（リトグラフ）の刷り工房で人手が足りないと言うことでアルバイトに通い出したのが、学生生活も終盤に差し掛かった頃でした。

その工房は幾人もの作家の方々が訪れ石版に描く図柄を、指示を受けた摺師の職人が色を調合し、リトグラフ作品を印刷、生産する場でした。今回、日本建築美術工芸協会に入会するきっかけを下さった井上勝江先生もそこでお目にかかったのですが、他にも大きな影響を与えて下さった作家の皆さん、職場の先輩や同世代の仲間たちとの仕事や交流を経て、美術表現とその制作への興味や意欲が、そのおかげで強まったことを覚えています。特に印象強かったのが、刷る色を決める為の作家との応酬、描かれた図柄の調子を印刷によって再現するための難しさでした。

色というものは人ぞれぞれにより感覚がかなり違い、また環境（その場での光源の種類や強さなど）によっても見え方が大きく左右されますが、作業の中で作家の方と交渉し合意を得ながら微調整を繰り返してインキを調合、更に刷り重ねて行くことは、それまで全く無かった体験でした。

後にその職場に正社員として採用され経験を重ねていくうちに仕事も任されるようになり、益々仕事の重みも増して行きながらも、来られる作家さんたちの個性の違いや、表現力の強さに魅かれて充実した日々でもありました。

転機となったのは工房で働きだして10数年経った頃でした。当時、自分の作品を作る事は少なくなってきていたのですが、知人から展覧会の出品を誘われたこともあり、工房の所属する印刷会社を思い切って退職することにしました。

それからはフリーランスとしてイラストや印刷物などのレイアウト、デザインを仕事としてこなしつつ、自分の作品を制作しながら発表を続けると言う、それまでとはまったく違った仕事や生活の形になり、戸惑うことや少々の苦労もありましたが、働いて来た体験が生きることも少なくなかった様に思えますし、数多くの色々なジャンルの世界から来られた人たちと一緒に仕事が出来たのもありがたい事であったと感じます。

また、作品制作に関しましても、長年怠ってきたブランクを、出会いと体験を糧に超えようとしている最中であると思っています。リトグラフや絵画、立体の小オブジェなどを下町の工場跡の小さな建物で細々と作っております。

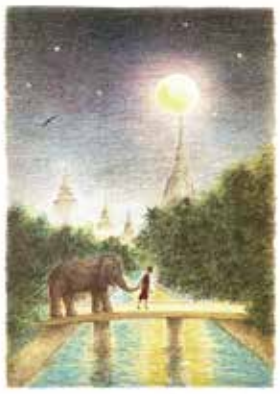
このたび、昔からお世話になっている井上先生と、展覧会でお世話になりました安河内先生のご紹介で入会させて戴きましたのもご縁かと思います。未だ々々不慣れでありますがどうか宜しくお願いいたします。

大通り

Tequla Sunrise

帰り着くところ

Sweet Memories



アユタヤの夢

土曜日の夜

望郷

ー Layer ー 繊維が描く綿による平面絵画

現代美術作家
日本建築美術工芸協会会員
線　幸子

1本の繊維が集合し、絡み合い、そして離れて自身の持ち場で描いていく。

綿（シルク）が生み出す思いがけない線は、意識した形と交じり合い、触覚的な肌触りと共に、絵画の世界を創りあげます。

綿と出会って、35年が過ぎようとしています。

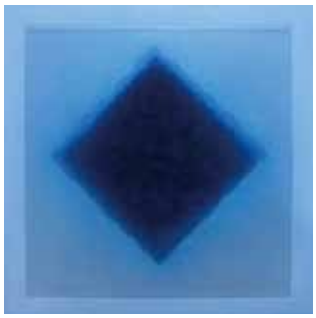
油絵を描いていた時期もありましたが、何かもの足りず、どこかで違うものを模索していました。

ある日、“ふわっ”とした白いかたまりを手にした時、まるで世界が透き通るような感覚に魅せられた私は、植物の種子である青梅綿で創作を始めました。現在は、蚕が生み出す真綿（シルク）の生命力を活かしたような作品です。

長い間、綿の可能性を探ってきました。その過程で、私の作品は、少しずつ変わり、移ろい、新たな創作に向き合う日々が続いています。しかし、思うように表現しきれないもどかしさに悩むこともありました。そうした思いの続く頃、文化庁の海外派遣芸術家研修制度を勧められ、ベルギーに滞在する機会を頂きました。

繰り返される日常を離れ、異国の生活の中で、文化や美術に触れ、考え方の違いを身近に感じ、人間の自由と表現は、果てしないものであることを改めて知りました。

その時の感性を信じて展開してきた作品創りは、行きつ戻りつ進んでいます。



2017 Layer ーまど A　73 × 73 × 7㎝

2018 Layer ーまどⅠ 90 × 90 × 10㎝

2019 Layer ーまどⅦ 34.0 × 25.4-㎝× 7.2cm

2010 Layer ー波動 160 × 90 × 5㎝

2019 Layer ーまどⅢ
41.6 × 24.3 × 3.6㎝

2015 Layer ー彼方より彼方へ 180 × 90 × 3.5㎝

2015 Layer ー Face Ⅰ -b
160 × 90 × 5㎝

ご挨拶に代えて

インテリア・プロダクトデザイナー
東京造形大学 特任教授
日本建築美術工芸協会会員
酒匂克之

この度、ご入会させていただきました酒匂と申します。

2001年に独立して丘の上事務所を設立し、早いもので来年で20年になります。

公共空間、商業空間、住空間、あらゆる空間に関わるデザインをインテリアからプロダクトまで手がけています。2017年からは後輩への思いもあり、母校である東京造形大学で教育にも携わっています。

また、2014年よりNPOウォールアートプロジェクトのサポートメンバーとして、毎年のようにインドに赴き、インド先住民族の仲間と共に、彼らの村で実践されているサステナブルな暮らしを体験し学ぶ、ノコプロジェクトというプログラムを行なっています。

昨年の夏は、ラダックに行ってきました。こちらも同様に世界森会議という学びのカンファレンスを開催するためです。ラダックはインド北部のチベット文化圏になり、1974年に外国人の立ち入りが解放された地域です。世界森会議にあたって、私たちは峠を越え、標高4,300mにあるパンゴンツォという湖に向かいました。パンゴンツォは東側2/3がチベット自治区、中国の実効支配地域になり軍事境界線が引かれている地域です。ここに向かったのは、この地域に住む遊牧民を訪ねて話を聞くためでした。

現地に向かう前に「ラダック　氷河の羊飼い」というドキュメンタリー映画を観たのですが、この映画はラダック奥地の過酷な環境の中で、数百頭の羊を連れて一人で遊牧生活をする老女の話でした。その遊牧民として生きる強い姿勢に感銘を受けたこと、また、現地の氷河が後退しているという話も聞いており、気候変動の影響を目の前で受けている遊牧民から、くらしについて直接話を聞いてみたいということになりました。

訪問した家族も老父がひとりで続けており、遊牧民としての生活はほぼ消えゆく状況でした。この地域では、1974年のツーリストへの解放以降、観光産業が盛んになり、ボーダー地域としての軍隊も含めた職業という概念が生まれ、遊牧も職業のひとつの選択肢として数えられて、衰退してしまったように感じました。

本来遊牧民の遊牧というのは、遊牧＝生活・くらしであり、職業ではなかったはずですが、その選択肢になることで、本来そこにあった〝くらし〟自体も失いつつあります。

ことしは、私たちの〝くらし〟も見つめ直す機会になっていると思います。私たちの場合は失くしてしまっていたものに気づき、再度呼び覚ますような意識でしょうか。

そんなことも考えながら、デザインと向き合っていきたいと思っております。

PORT

POLYGON PICTURES

オーテピア高知図書館（家具デザイン）

ノコプロジェクトで先住民族と建てた小屋

ペリカンカフェ

ミライon（長崎県立長崎図書館及び大村市立図書館＿家具デザイン）

遊牧民を訪問したラダックの湖 パンゴンツォ

ノグチミエコ　展示会レポート
自粛明けの東京で個展を開催して
「MIEKO NOGUCHI　錬金術師の部屋」

2020 年 6 月 15 日から 26 日　靖山画廊・東京銀座にて

ガラスアーティスト
日本建築美術工芸協会会員
ノグチミエコ

東京都に自粛要請が出て一ヶ月余り。6 月頭に各業種が解禁となり自粛明けの個展開催となりました。展示会ができなくなってしまった作家たちも大勢いる中で自分も開催できるかどうか不透明な状態を抱えながらの制作期間でした。マスクはしなければいけない、私の工房は吹きガラス工房でどうやってガラス作るのだと、しかし展示会のための制作はしなければ間にあわないと、工房のスタッフたちの不安も受けながら吹きガラスの作業は中止しそれ以外の仕事を進めていました。自粛明けから工房業務もスタートしましたが以前と同じやり方ではできないのではと話し合い、チームでの吹きガラスの仕事ができず効率が上がらない状態が続いております。

今回の個展では制作が佳境に入る時期とまだよくわからないとされていたコロナウィルスの騒動が重なり世の中も自分の環境も連日連夜コロナのことばかり、気持ちは制作へのインスピレーションが湧き出すというよりは今の状況を吐き出すような作品しか作れなくなっていきました。コロナウィルスにこそ StayHome してほしい、地球ごと滅菌してしまえと制作したフラスコ達。綺麗な地球が培養できたらと想像した実験器具のイメージを形にした作品が展示されました。

コロナ禍が完全には収まりきらない中で始まった個展ではありましたが自粛明けを待って来場してくださったお客様はじめ、友人たち、取引先の方々、本企画を主催していただいた靖山画廊の皆様に支えられて無事終了することができました事作家として感謝の気持ちでいっぱいになりました。作品を楽しみにしてくださっている方がいるという事。企画を諦めずに開催していただけけた事。人は誰かに喜んでもらいたくて生かされていると思う今日この頃です。作家活動は自己中心的な作業が多いのかもしれませんが作品も環境でいかようにも変化するまた変化せざるを得ないのかもしれません。皆様も引き続きこの環境に慣れるまで気をつけてどうぞご自愛ください。

会場風景

地球培養液

個展の DM

会場風景

会場風景

惑星 COVIT-19

新規入会法人会員のご紹介

リリカラ株式会社

リリカラ株式会社　営業開発部
日本建築美術工芸協会法人会員
中澤　淳

当社は、「快適な生活空間を創造し、提案する」ことを企業使命として、個人住宅からオフィス、ホテル、商業施設、公共施設などの空間づくりをインテリアという視点からトータルに提案をしております。主力商品の壁紙・カーテンについては自社で企画開発した商品を「リリカラ」ブランドで販売し、商品開発力やデザイン力にかけては、業界最高水準であると自負しています。お客様の多様化するニーズにお応えし、住宅をはじめ、ホテル、オフィス、学校、店舗、医療・福祉施設等、快適で豊かなインテリア空間づくりを提案させていただいております。

スペース ソリューション事業は、発足当初の事務用品の販売からオフィス家具の納入へ次第に事業領域を広げ、現在ではデザイン・内装・空調・照明からICTまで、オフィス移転・リニューアルのプランニングから実施、アフターケアに至るまで、トータルでマネジメント致します。また近年リノベーション事業を発足させ、ホテル・医療施設・テナントビルなどのリニューアル需要に対し、コンセプト提案から具体的な設計図面の作成、工程管理、関連什器の販売、不動産売買、オフィス仲介業務まで幅広いサービスを提供しております。

リリカラは「東京発」の様々なスタイル発信に向けて、時代をリードする最新のデザインやこれまでの伝統を守りながら多彩な文化を表現したデザインなど、業界からも高い評価を頂いております。そして、日本の伝統的なデザインである「kioi」や「竹久夢二の壁紙 Re;foRm」に加え、海外からは「Morris & Co.」「miffy」といった欧米ブランド等、オリジナリティー高い付加価値商品も当社ならではの魅力です。

日本文化を継承する伊勢型紙文様「kioi」は、紀尾井アートギャラリーコレクションの型紙から選りすぐったデザインを、インテリアや建築空間に向けて新たにご提案させていただいております。紀尾井アートギャラリーとリリカラ、伝統工芸・付加価値の高い加工技術を持った制作会社・素材を、設計・デザイナー・コーディネーターの皆様につなぐ取組みを「kioi　アライアンス　ネットワーク」と名付けて取り組んでおります。型紙の意匠を様々な素材・手法に合わせ、現代の生活空間に新たな装飾の可能性を、制作会社の営業的なスタンスでサポートさせて頂いております

リリカラ

株式会社ウォーターデザイン

株式会社ウォーターデザイン　代表取締役社長
日本建築美術工芸協会法人会員
山本　誠

弊社の設立は昭和39年（1964年）と、奇しくも前回の東京オリンピック・パラリンピックが開催された年になります。本年の開催は見送られてしまいましたが、次年度以降の開催には期待が膨らむばかりです。

当協会には、過去にも参加させて頂いた経緯があります。今回の参加は復帰という形になりますが、改めましてこの機会に今後ともご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い致します。

弊社は当初、噴水をはじめとした水景施設についての施工を行う企業としてスタートしました。初めは、機械技術としての水景を施工することに専心しておりましたが、昭和45年（1970年）大阪万博のときに＜環境造形研究所＞という部門を興しました。これは、創業者である大根川の「噴水は水の造形アートである」という想いに因ります。

以降は、石材・金属を中心とした彫刻家の方々、建築・造園に携わる多くの先生方にお世話になりながら、より魅力的な水空間を創造できるよう精励しております。時には、造形物と水を結び合わせた造形噴水作品を制作・施工させて頂く機会もあり、こういった作品は水単体による演出ではなしえない感動、満足を与えてくれるものと感じております。

また、水と対照的な要素として、太陽をモチーフとした日時計彫刻“サンスカルプチャー”も弊社の主要事業として各地に展開しております。

近年においては、街中や公共空間における造形・彫刻の在り方も大きく変容している印象を受けます。新型コロナウイルスによるショックは、「ものから心」への移行をもたらしていますが、心の発信である美術工芸、ひいては水景が良き方へ向かうよう苦心しなくてはと考えております。

五感へと訴える噴水・造形噴水、そしてサンスカルプチャーを通じて、我々ウォーターデザインはこれからも環境演出・環境造形・環境改善に携わっていく所存です。

会社名	株式会社 ウォーターデザイン
設立	1964年2月
本社	東京都港区新橋6−9−2
東京本社	東京都大田区昭和島2−4−2
営業所	大阪・福岡・東北（仙台）
事業概要	-1 環境演出-噴水等を主体とした空間の企画・デザイン・設備設計・施工・保守管理 ー噴水装置・滝・流れ・子供の水遊び・ショー噴水等 -2 環境造形-造形噴水・サンスカルプチャ-・モニュメントの企画・デザイン・設計・製作・施工 ー石・金属造形噴水・日時計造形・モニュメント・造形水飲み・造形ベンチ等 -3 環境改善-各所の環境・健康改善のシステム提案及び設計・施工 ークールミスト・湿度管理ミスト・空中浮遊物沈下ミスト

会津若松市多生苑西栄町（造形ベンチ）

宮城県大河原町小島公園（造形水飲み）

響灘緑地ガラスミスト

国営昭和記念公園

船橋市アンデルセン公園

福島県あづま総合運動公園

碧南市明石公園

本四連絡橋与島サンスカルプチュア

東洋アルミニウム株式会社

東洋アルミニウム株式会社
新事業創造部　担当課長
日本建築美術工芸協会法人会員
髙根喜一郎

弊社は、アルミ箔と板の製造販売を目的とし、1931 年に世界有数のアルミ会社、カナダのアルキャンと住友の出資により誕生した『住友アルミニウム株式会社』を前身としています。

その後、財閥解体政策により、商号を『東洋アルミニウム株式会社』に変更、現在は日本軽金属 HD のアルミニウム製品メーカーとして、来年には創立 90 周年を迎えます。

アルミ箔・アルミペーストのトップメーカー

軽い、強い、錆びにくい、光や熱を反射する、リサイクルが可能で環境にやさしい…。

アルミニウムはさまざまな優れた特性を持っています。私たち東洋アルミグループは、これらアルミニウムの優れた特性を活かし、社会や産業、暮らしに役立つ高機能素材を生み出してきた先駆者です。

会社創業以来、アルミニウムの機能性・意匠性用途の可能性を追求し、クッキングホイルなどの日用品から菓子・インスタント食品・薬品のパッケージや電解コンデンサに使われるアルミ箔。

自動車用メタリック塗料・固体ロケット燃料・IC 基板などでご採用いただいているアルミパウダー・ペースト。

また、その他日用品や、太陽光発電の部材まで、社会に有用で、環境にやさしい製品を開発し、社会に貢献してまいりました。

新たなビジネスの創出に向けて

特にアルミペーストでは世界トップクラスのシェアを持っており、基礎研究から高度の加工技術、次世代のニーズを先取りした研究・開発を実施しています。

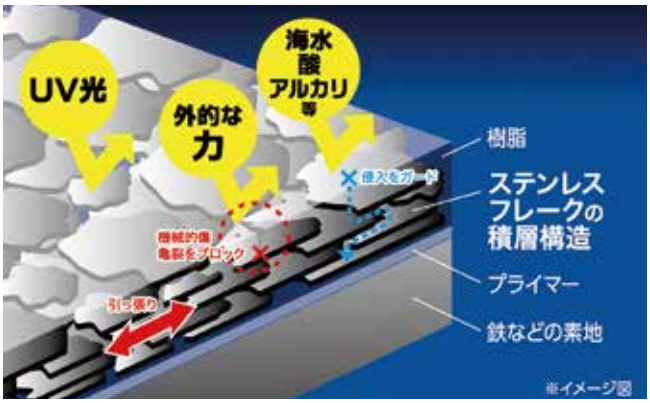
その長年に亘り培った技術で、アルミニウムの枠を超えた、社会に有用で、且つお客様に感動を与える製品を提供し続けます。

ステンレスフレーク含有塗料『ステンシェル® 』の提案

『ステンシェル ®』は、弊社のアルミペースト加工技術を活用し、高品質のステンレス（SUS316L）を厚さ 0.3 μ m に加工し、塗料樹脂に配合させた強靭で耐食性や耐久性にも優れたハイブリット塗料です。

ステンレスフレークと樹脂による積層構造塗膜を形成することで、腐食因子の浸入をバリアし、長期に渡り素材を守り続けます。

また、樹脂と親和・密着した『ステンシェル ®』の積層構造塗膜は、耐摩耗性や耐チッピング性に対しても優れており、屋内外の構造物・工業製品、金属類に限らず様々な幅広い用途でご採用いただけます。



『ステンシェル』積層構造塗膜のメカニズム

意匠性、耐食性に優れた構造物へのご提案『出島表門橋』aaca ホームページより

耐食性に優れたボルトへのご提案

塗替えが困難な用途での長期メンテナンスフリーのご提案

東洋アルミニウムは、今後も独自のコア技術の強みを活かした開発力を成長の源泉として、『未来を創る、私が創る。』という行動方針の下、お客様のご要望に応え、新たな社会の発展に貢献してまいります。

何卒、宜しくお願い申し上げます。

東京オフィス
〒105-0004　東京都港区新橋一丁目1番13号
アーバンネット内幸町ビル6階
03-5501-0777（代表）
新事業創造部　　担当　髙根

ー「光」はどこまで「人」をしあわせにできるだろう

様々な視点でお客様の要望を追求しながら、空間に優れた「価値」を創造して参ります。

株式会社 遠藤照明　代表取締役社長
日本建築美術工芸協会法人会員
遠藤 邦彦

日本建築美術工芸協会会員の皆様におかれましては、平素より、格別のご愛顧を賜り、厚く御礼申し上げます。

遠藤照明は、1967年に創業し、2009年にLED照明事業に本格参入。創業以来、単に照明器具を製造するのではなく、様々な視点でお客様の要望を追求しながら空間に優れた「価値」を創造していく、という想いをもち続けて参りました照明専業メーカーです。特に昨今は、「光」が「人」の心理や身体へ与える影響を考慮し、より豊かな光環境を、より少ない資源とエネルギーで実現することを目指し、チャレンジを続けております。

お蔭様でその想いと製品価値にご賛同いただき、オフィス・学校・商業施設をはじめ、「京都国立博物館 平成知新館」「川口市めぐりの森」などの公共施設にも弊社製品をご採用いただいております。

永遠のテーマ「『光』はどこまで『人』をしあわせにできるだろう」それを具現化した新製品「Synca」について

さて、新型コロナウイルスの影響により長期間に及んだ在宅勤務や休校などにより、私たちの意識はこれまでにないほど、生活空間における“快適性”の追求へと向けられているのではないでしょうか。また、これまでは当たり前であった外食や買い物・旅行に期待する“特別感”は一層高まっていくと考えます。そのような“新しい生活様式”への移行が求められるタイミングの中、私たち遠藤照明の永遠のテーマを追求した次世代調光調色シリーズ『Synca（シンカ）』を新発売させていただきました。本製品が目指す姿も、光環境における“新しい日常”をつくり出すことです。

- 健康的な生活のために、体内リズムを整え質の良い睡眠をサポートすること。
- 生産性向上のために、一人ひとりに合ったはたらく環境をつくり出すこと。
- こころを満たすために、美しさやおいしさといった魅力を高めること。

「Synca」は、これらを実現するため、光の「色」と「演出」を追求した製品となります。さらに最も特長的な点は、人工の光でありながら限りなく自然に近い光をつくり出すと共に、色味調整機能や、カラー演出機能を1台に備えた、一台三役※の画期的なLED照明シリーズであるという点です。※業界初

これにより、今までは専用器具を追加しなければならなかった色味調整やカラー演出機能も照明器具台数や価格を気にせずにご導入いただくことが出来、商業施設／オフィス／宿泊施設／医療・福祉施設／教育・保育施設などあらゆる空間の様々な課題を解決、建築・美術・都市において、今までの想像を超える「新しい光の価値」創造に貢献できると考えております。

100年に一度ともいわれる経済危機が予想される中ですが、次世代調光調色シリーズ『Synca』を通じ、光のプロフェッショナルとして、LED照明のパイオニアとして、これからも、高付加価値空間を創造してまいります。

次世代調光調色シリーズ「Synca（シンカ）」製品特長

1. ろうそくの光(色温度1800K)から青空光(色温度12000K)まで、自然の光を再現
2. 高い演色性に加え、色味（赤み、緑み）の調整が可能
3. 121種類のカラー演出機能
4. 使いやすさを追求したコントローラ画面
5. 一台三役（自然の光、カラー演出、色味調整）でありながら、導入しやすい価格設定

遠藤照明　納入事例

京都国立博物館 平成知新館

川口市めぐりの森

東京ミッドタウン日比谷

連載（4 回連載）

藤井厚二と木造モダニズム建築「聴竹居」（1）

竹中工務店設計本部
聴竹居倶楽部代表理事
日本建築美術工芸協会法人会員
松隈　章

■「日本の住宅」を追い求めた建築家・藤井厚二

大正から昭和初期にかけて活躍した建築家・藤井厚二は、真に日本の気候風土や日本人の感性に適合した「日本人の理想の住まい」を追求した建築家として近年特に注目を集めている。

1888（明治 21）年、藤井厚二は現在の広島県福山市宝町に素封家の次男として生まれている。父・与一右衛門は、十数代続く造酒屋・製塩業・金融業「くろがねや」を営んでいたかつての御用商人。福山中学を経て、岡山の第六高等学校を卒業。1913（大正 2）年、東京帝国大学工学科建築学科を卒業した藤井は、当時神戸にあった竹中工務店に初の帝大卒として入社する。1899（明治 32）年に創立し近代建設業への飛躍の途にあった竹中では、大阪朝日新聞社など主にオフィスビルの設計を手掛け設計組織の基礎をつくるが、わずか 6 年足らずの在籍ののち退社する。その後、1919 年から 1920 年にかけての約 9 か月間、私費で欧米 6 ヶ国を巡り、当時の日本でオフィスビルなどと比較して近代化が遅れていた「住宅」とその「設備」を中心に視察して帰国する。

帰国後の 1920（大正 9）年に創設された京都帝国大学建築学科に招かれて教鞭をとった藤井は今で言うところの「環境工学」にいち早く取り組んだ。1923（大正 12）年の関東大震災の惨状を 3 週間後に視察しより一層「日本」という気候風土を強く意識した藤井は、代表的な著書『日本の住宅』を 1927(昭和 2)年に発行している。それは、緒言に続き、和風住宅と洋風住宅、気候、設備、夏の設備、趣味の 5 つの章で構成された環境工学の最初期の理論書として有名である。明治維新以降の欧化・近代化政策で盲目的に欧米の模倣を推し進めた結果、和洋折衷と日本の伝統がただ雑然と混交している生活様式、さらに、欧米化する住宅を文化住宅と信じて忠実に模倣するような時代だった。そうした時代に「彼我の歴史人情風俗習慣及び気候風土を対比せば、総て非常に相違のあることが知られます」との疑問を持った藤井は、その責任は建築家にあるとした上で、「我々は我国固有の環境に調和し、其の生活に適応すべき真の日本文化住宅を創成せねばなりません」と本書執筆の意義を緒言に記している。

そして、1928（昭和 3）年に第 5 回目の住宅として京都府大山崎町の天王山の麓に自邸「聴竹居」（ちょうちくきょ）を建てている。

■ 木造モダニズム建築の傑作・重要文化財「聴竹居」

「聴竹居」は、環境共生住宅の原点と言われている。すなわち、日本の民家で経験的・伝統的に行われてきた気候風土に合わせる建築的方法 - 環境と共生する技術や素材 - を科学的なアプローチで捉え直し、パッシブ（自然のエネルギーを生かす）で先進的な住まいを藤井は創り上げようとしたのである。

日本には、もともと四季ある気候風土に寄り添うように呼応し自然の材料で建ててきた木造建築の長い歴史がある。それらには、西欧の強い表現と装飾を伴った「様式」はなく習作を重ねた末の「型」があり、「茶室」に代表される「数寄屋」建築はその代表格と言える。しかし、江戸から明治に移り日本の近代化が始まると、それは西欧化と同時に進められ、昭和初期まで日本の気候風土とは無関係に直輸入の洋館や和洋折衷の住宅が次々と建てられていったのである。

一方、欧米では様式建築から脱皮しようとしたインター

全景

縁側部分

客室

ナショナル・スタイルが興り 1932 年に行われたモダン・アーキテクチャー展で「無彩色」「無装飾」「自由な間仕切り」と定義づけられ発表されたが、それはまさに日本の伝統的な木造建築にあるもので、19 世紀に「浮世絵」が「印象派」に影響を与えた「ジャポニズム」と同様に欧米の建築家に大きく影響を与えた。それを証明するようにドイツのバウハウス運動の中心人物で建築家のヴァルター・グロピウスも著書の中で「古い日本と近代西洋の建築的アプローチの驚くべき類似が説明できると思います。（中略）日本の伝統住宅は、驚くほど近代的でありますが、それは現代の西洋建築家たちがいまなお格闘している諸問題、すなわち、動く外壁と内壁という完全な融通性、空間の変化性と多目的性、すべての建築部分の標準寸法による調整、そしてプレファブ工法などにすでに完全な解決を与え、しかもそれがすでに何世紀も経たものであるからであります。」と記している。

藤井は、洋風住宅がもてはやされた時代にあって、日本の住まいで伝統的に取り入れられてきた気候風土に合わせる建築的方法を科学的な観点から見直し、日本の気候風土と日本人の感性に適合し、欧米の椅子式のライフスタイルや家事労働を軽減する家電を備えた最先端の「日本の住宅」を追求、今で言うところのモデル住宅「聴竹居」を実現したのである。

＊聴竹居　ホームページ
http://www.chochikukyo.com/
＊竹中工務店　ホームページ
CSR －Feuture－ 人と機械を未来へつなぐ「聴竹居」
https://www.takenaka.co.jp/enviro/feature/03/

「聴竹居」で実現した藤井の先進性を示す主なもの

1. 科学的アプローチを駆使したパッシブな（自然エネルギーを生かす）工夫
2. 洋風と和風そしてモダンを統合したデザイン
3. 住まいの“原型”としての居間中心、家族中心のプランニング
4. 住宅地から家具什器まで新しい「日本の住宅」のライフスタイル全体をデザイン

藤井は環境工学による住宅研究と実践の完成形を「聴竹居」で実現し、その成果を図面と写真と解説からなる「聴竹居図案集」を 1929（昭和 4）年に、さらに 1930（昭和 5）年には、理論書「日本の住宅」とこの「図案集」を合体させた英語版の「THE JAPANESE DWELLING-HOUSE」を著し、「日本の住宅」の素晴らしさを世界に発信している。その後も約 50 の住宅を設計したが、1937（昭和 12）に完成した京都の中田邸「扇葉荘」が遺作となる。1938（昭和 13）年没。享年 49。京都嵯峨野・二尊院にある自ら病床でデザインした墓所に眠る。「聴竹居」に住んでわずか 10 年の短い生涯であった。

機械文明に陶酔し効率重視の設備機器に頼り自然への畏れや本来あるべき快適さを忘れつつある一方、「環境」がますます大きなテーマとなってきた 21 世紀。今だからこそ、藤井のように「真に日本の気候・風土と日本人の身体に適した住宅」を追い求め続けることが必要だ。

「日本の住宅」の理想形を生涯追い求めた藤井の残した名言「其の国を代表する建築は住宅建築である」のもつ今日的な意味は極めて大きい。

写真提供：株式会社竹中工務店
撮影：古川泰造

居室と食事室

縁側

藤井厚二　肖像写真

法人会員の設計事務所を訪ねて

株式会社久米設計 Part 2
丘の上のスタジアム（栃木県総合運動公園陸上競技場）

広報委員会

背景・目的

本計画は、栃木県が推進する、県民の多様なスポーツ活動に対応した県民総スポーツの推進拠点となる総合スポーツゾーン整備の一環。宇都宮市の中心部から南へ約 9km 離れた場所に位置し、前回の国体会場にもなった総合運動公園と、隣接する競馬場跡地など未利用県有地を含めた区域を「総合スポーツゾーン」として整備するもの。

その中心施設として、競馬場跡地に計画されたのは、陸上競技場兼サッカー場の新築。第 1 種公認陸上競技場および J1 施設基準に準拠した約2万5千席あるスタジアムとして整備し、2022年開催の国体メイン会場利用を見据えるとともに、地元プロサッカーチームである栃木 SC のホーム戦も予定されている。

新しい風景をつくる

建設エリアの周囲は戸建て住宅を中心とした住宅地に囲まれた場所。圧倒的なスケールのスタジアムとの調和が課題となった。量感を全く感じさせず周囲の景観に溶け込みまじりあう“融合”ではなく、対比させ景観のアクセントとして“調和”した「新たな風景」をうみだすことを目指した。スポーツをはじめとするイベント施設としての昂揚感演出との両立や、都市のアイコンとして地域の価値向上やシビックプライドの醸成を期待した。

丘との一体化と地域に開かれたスタジアムづくり

建物外周を建設残土を利用した緩やかな丘と一体化させることで量感の軽減とともに持ち上げられた上部スタンドが浮遊感をうみ圧迫感の軽減を図っている。丘の上にはリング状の外周コンコースを整備し緩やかな勾配の園路と接続して公園内のアクティビティの連続を図った。竣工後はジョギングやウォーキングなど積極的に利用されている。この丘の上のコンコースは、住宅地からみえるまちのステージとして賑わいの演出し、遠方の山並みなどを眺望できる視点場としての役割を果たしている。

南側メインアプローチデッキからみた全景

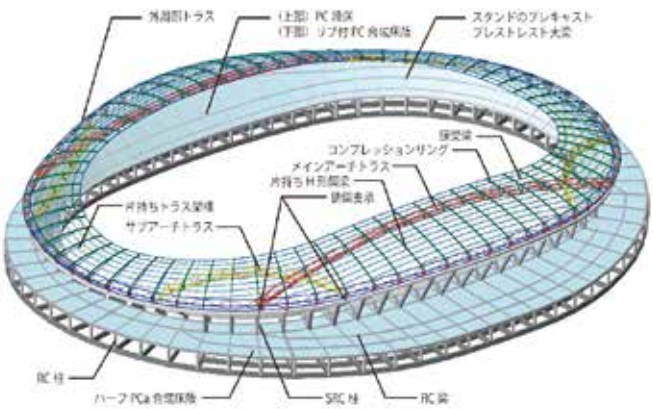
躍動感と臨場感あふれるスタジアムづくり

建物形状は、芝育成と観客席の配置を最適化した曲面の屋根形状とスタンドを三次元形態の外郭で覆った有機的なデザインが特徴。天然芝の育成に必要な日射量や通風、観客席からの視認性、外部への音漏れ、周辺風環境への影響、外形のコンパクト化などを、パラメトリックにデザインをすることで意匠・構造・設備が一体となった最適なデザインを導き出した。同時に直線のない、うねるような曲線による形態によって巨大で人工的な造形物が景観と対立することなく調和を図った。

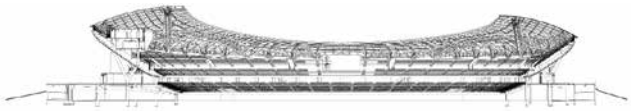
3次元形態を利用したスタジアム架構

架構は観客席を受けるスタンド下部架構と屋根架構が相互に作用する安定した構造を目指した。屋根は緩やかな曲面を持った形態をアーチ効果として利用した6枚の“栃の葉”を重ねたイメージのトラス構造としている。この栃の葉をかたち取る位置に最大160mのアーチトラス（鉄骨トラス)をメイン､バックスタンドに3本ずつを交差させて配置。膜屋根先端の周方向鋼管梁のコンプレッションリング化により屋根を一体化して変形抵抗性を向上。アーチトラスから放射状に作用するスラスト力は、スタンド上部の外周部（リング)トラスを介してPCaPC造スタンド架構に伝達し、スタンド周方向に現場緊張したリング状のPCa梁にて力学的に自己完結する形態とした。アーチ効果を利用した屋根とスタンド架構は一体化され、力学的にも合理的な構造となっている。

（久米設計　小塩智也）



構造架構イメージ



東西断面図　S=1/2500

主な概要

■所在地　栃木県宇都宮市西川田2丁目
■建築主　栃木県
■設計・監理　久米・AIS・本澤特定建築業務共同企業体
■構造　スタンド/RC造、SRC造、屋根/S造
■規模　延床面積42,037.52㎡、最高高さ33.730m、
　　地上4階、収容観客数25,022席
■竣工　2019年10月・供用開始　2020年7月

丘の上に建つスタジアム

膜屋根に覆われた観客席とフィールド全景

スタンドより持ち上げ浮遊感を演出した VIP 棟

早稲田大学（西早稲田キャンパス、戸山キャンパス）

建築家
KAWASE 計画事務所
日本建築美術工芸協会会員
川瀬俊二

私達が早稲田大学理工学部建築学科に入学した年は、東大入試が無い年で、普通 180 名定員の建築学科が少し多めに入学した年でした。入って直ぐにストライキとなり、半年間、大学に行っては、皆で集まり、雀荘や茶店に行くような日々でした。やっと授業が開始されるわけですが、西早稲田キャンパスは、普通の大学のキャンパス、即ち、レンガや石の外壁に蔦が絡まるようなイメージでは無く、校舎も、キャンパス広場も、コンクリートで、工場のような、一方で、近代建築の見本のようなキャンパスです。今でも時々、訪問しますが、新大久保や高田馬場から歩いても、そこそこ掛かり、良い散歩になりました。（現在は、東京メトロ副都心線西早稲田駅が直結しています。）この、理工学部キャンパスを設計したのは、安東勝雄教授をリーダーとする設計グループでした。高層棟の 51 号館は、18 階建て、高さは 65m ですが、短い間、日本一の超高層ビルディングでした。1967 年の日本建築学会作品賞を安東勝男・松井源吾で受賞しています。

理工学部は、物理の実験や出席しないと単位の取れないシラバスが多く、1 ～ 2 年の時もかなり忙しかったですが、私は、運転免許を取ろうと、自動車倶楽部に入りました。理工学部にも自動車部がありましたが、こちらは車を分解したり修理したり、本格的で、理工学部の授業と時間的に両立しないので、早稲田大学本部の自動車倶楽部にしたのです。おかげで、法学部、政経学部、商学部などの友人が出来ました。文学部のキャンパスは中庭がフラットで、広く、今では信じられませんが、車の乗入れが出来たのです。そして、自動車倶楽部の活動が広場で行われ、古いセドリック 1500 などを運転して、ドライブの練習をしたものでした。先輩が助手席に乗り、無免許の新入部員は、先輩の指導で、エンストを繰り返しながら、ドライブ技術を習得し、鮫洲や小金井の試験場で試験を受け、免許を取得するのです。

さて、この文学部校舎を設計したのが村野藤吾（1918 年卒）です。村野デザインらしいオーナメントは殆ど見られません。大学の校舎として、あまりデザインを主張しないで、長く学生達に親しまれる建築として設計した、と村野は述懐しています。柱と梁のフレームを表した端正な立面は横浜市庁舎などの村野作品を彷彿させるデザインです。高層棟と中層棟に囲まれた広場では、様々な集会やイベントが行われましたが、まさか、ここでドライブの訓練が行われるなど、村野も想像していなかった事でしょう。この名作、文学部 33 号館は、惜しまれながら、2013 年に解体されましたが、その見納めに有志によって見学会が催されました。

私は、早稲田大学を卒業して大林組に入社し、長い間、設計本部に在籍し、横浜ビジネスパーク、六花亭製菓、電通新本社ビルなどのプロジェクトを担当しました。この間、舟橋巌設計本部長（1951 年卒）の推薦により、ボストンの MIT サマースクールに派遣されたのは貴重な経験でした。そして、大学の依頼により、早稲田の建築学科の電通新本社ビルの設計施工の全プロセスを半年に渡って、早稲田の建築学科の大学院生や卒業生に講義しました。この講義録を基に『電通本社ビル　全行程の記録』が建築資料研究社より 2005 年に発刊され、建築学科の教材として活用されています。そして、プロポーザル部に異動してから東京スカイツリーを担当しました。この時、国内外のタワーをいくつか調べましたが、東京タワーを初め、名古屋、札幌など、日本のタワーの殆どの構造設計を担当したのが、耐震構造の父と呼ばれた内藤多仲でした。タワーの仕事をした事により、建築学科の創設にも内藤多仲博士が尽力していた事を知りました。

早稲田大学の前身、東京専門学校は大隈重信によって 1882 年によって創設され、1902 年に早稲田大学と改称されました。1908 年に理工科が設置され、1909 年に建築予科の

西早稲田キャンパス 51 号館

西早稲田キャンパス 55 号館

戸山キャンパス 31 号館、奥に新 33 号館

授業が開始、1910年には建築本科となりました。開設に関しては、総長大隈重信、学長高田早苗から全てを任された新進気鋭の佐藤功一が当たりました。そして、東京タワーの生みの親である内藤多仲（構造）、岡田信一郎（設計）、伊東忠太（建築史）、今和次郎（意匠）などを招き、今井兼次、佐藤武夫、木村幸一郎といった初期卒業生に受け継がれ、早稲田建築のスクールカラーを形成していったのです。設立の初期から、製図、衣装論、構造、設備、施工、法規、都市計画といった分野を網羅し、歴史の中で、教育方針、カリキュラム、活動範囲など、それぞれの専門性の習得と共に横断的、協同的な姿勢を兼ね備え、現在に至るまで、広く活躍する多くの卒業生を送り出しています。

1925年には、今井兼次設計の早稲田大学図書館が竣工し、1927年には、早稲田大学のシンボルともいえる早稲田大学大隈記念講堂が佐藤功一、佐藤武夫の設計で竣工しています。この構造設計にも内藤多仲が参画しています。1957年、耐震構造研究館（現・内藤多仲記念館）竣工。1965年に大久保キャンパス理工学部校舎一期が完成し、1967年に建築学科のある理工学部が、大久保キャンパス（現・西早稲田キャンパス）に移転しました。1991年には、鈴木恂（1959年卒）が設計した55号館が西早稲田キャンパスの明治通りに面して竣工しています。今井兼次が1925年に設計した早稲田大学図書館は、後に、會津八一記念博物館となり、1998年に、古谷誠章（1978年卒）によって改修設計されています。2010年には、建築学科創立100周年を迎え、新しい校舎が、次々と建設されています。最近では、前述の村野藤吾設計の文学部校舎跡地に、KAJIMA DESIGNの設計で、新33号館が2014年に竣工しています。また、早稲田アリーナが山下設計の設計で、2018年に竣工し、其々の設計事務所の早稲田建築卒業生が担当して、時代に呼応した新しいキャンパスを創造しています。

私達1969年入学年度の頃は、吉阪隆正（都市計画）、武基雄（計画）、池原義郎（建築計画）、穂積信雄（建築計画）、渡辺保忠（建築史）、松井源吾（構造）、田村恭（材料）、神山幸弘（施工）など錚々たる教授陣に恵まれ、加えて菊竹清訓（1950年卒）らの講師陣が授業を充実させていたのです。菊竹清訓は、スカイハウス、出雲大社庁の舎、エキスポタワー、江戸東京博物館など、多くの名作を遺しましたが、Kサークルと呼ばれる菊竹事務所のOBには、大江匡、内井昭蔵（1956年卒）、伊東豊雄など多くの建築家が輩出しています。更に、卒業生には先に述べた早稲田大学文学部33号館などを設計し、日本を代表する建築家村野藤吾（1918年卒業）を初め、コルビュジェのアトリエで学んで帰国し、大学セミナーハウス（ドコモモに選定）を設計した吉阪隆正（1941年卒業）、菊竹清訓、内井昭蔵、森義純（1970年卒）、古市徹雄（1973年卒）、東大名誉教授で、100年に一度という渋谷の再開発のデザイン会議長を務めている内藤廣（1974年卒）、芸術院賞受賞の古谷誠章（1978年卒）らの建築家を輩出しています。また、同期の1973年卒には、佐藤滋（都市計画）、西谷章（構造）、長谷見雄二（防災）ら3人が教授となりました。ダムダン空間工作所を設立した石山修武（1966年卒）、近年、村野賞を受賞した入江正之（1969年卒）も長い間、建築学科の教授を務めました。また、小田和正（1972年池原研修士卒）は、音楽家として活躍し、佐藤オオキ（2000年卒）は、東京とミラノにオフィス、nendoを開設し、インダストリアルデザイン、グラフィックデザイン、建築などの分野で国際的に活躍しています。最近では、大学、研究室、設計事務所、建設会社などの建築系に限らず、不動産、コンサルタント、投資会社、銀行など他分野に、早稲田大学建築学科から就職しており、今後も、卒業生が幅広く活躍していく事を期待しています。

本部キャンパス大隈重信像

早稲田大学図書館（現・會津八一記念博物館）

早稲田大学坪内博士記念演劇博物館

会員増強委員会だより

第 2 回 aaca サロンの開催報告
『都市の関係性にはたらきかける“もの”』

須田武憲（GK 設計）、齊木慶一（スペース・メニュー・ラボ）両氏をお迎えして

建築家
会員増強委員会委員
株式会社 NTT ファシリティーズ
日本建築美術工芸協会法人会員
石原智也

第 2 回の aaca サロンは、たまたま同時期に入会されたお二人に『都市の関係性にはたらきかける“もの”』と題して、それぞれこれまでの活動と関心のありどころをご披露いただき、建築やアートを環境や時間との関係でとらえることや、市民参加にも関連する話題など、参加者も交えて興味深い意見交換を行うことができました。

須田さんからは、都市の環境デザインについて、①道具がつくる都市景観、②動く道具による都市の新風景、③仮設がひらく未来のアクティビティ、というテーマでご紹介がありました。ここで言う道具とは、GK グループの創設者である栄久庵憲司氏が、「モノに心あり」という仏教の教えから道具を人間の鏡と捉え、いわゆるモノにとどまらない、建築や都市空間も含めた広範な概念のことを表しています。

①は、道路などのインフラや建築以外の付随する道具が風景をつくっていることに焦点をあて、たとえばイスラム教の巡礼者が年に一度、数百万人が集まったときのためのインスタントシティーをつくる、メッカのマスタープランの提案が紹介されました。実現には至らなかったそうですが、必要に応じてつくるという考え方は、情報化が進み即時性が求められる現代においてますます重要になっています。1970 年の大阪万博では、ストリートファニチャーを初めてデザインの対象として扱い、建築以外の要素で風景をつくる先駆けとなりました。上質なデザインの工業製品で風景を構成する方法論は、今では当たり前になって日常風景のデザインの質を向上しています。

②では、コンパクトシティの代表例として、ヒューマンスケールの街を構成する富山ライトレールがよく知られています。新潟市の BRT や宇都宮ライトレールでは、車両だけでなく職員の名刺まで、さらには乗ることの体験まで含めてトータルにデザインすることが試みられていて、交通システムが地域のアイデンティティとして創造されています。

③は、ウィルスも通さないジッパーを使った手術室にもできるテントやモデュール化した個室など、防災への取り組みで養った仮設のノウハウを日常的に活用する試みです。ニュータウンなどで街が成熟し、人口減少で使われなくなった公共スペースや道路予定地などに、仮設店舗などを設置して街を再活性化するものです。デザインとともに、成熟期の社会制度に対する提案でもあります。

建築家であり彫刻家でもある齊木さんは、「建築・美術・都市」は一本線上にあり、キーワードは「関係性と変化」だと言います。イギリスの AA スクールで師事したセドリックプライスのもとでの経験が大きく影響していることが、数々の作品とともに紹介されました。

「進化する家」は、家族がライフサイクルで変化することに対応でき、また、敷地のある新興住宅地の成長や変化にも対応できる住宅です。グリッド状の木造と鉄骨の混構造で、変化に対応できる余白があらかじめ構成されています。

第 14 回 KAJIMA 彫刻コンクール金賞作品の「結界」は、募集条件にある設置場所の環境、特に周囲のバルコニーや列柱

メッカマスタープラン

新潟市 BRT

大阪万博

仮設でつくる公共空間

からの見え方の変化を意識して構想されています。作品は、オブジェクト・物体そのものではなく光や視線、空間と人との関係性に主眼を置いた概念のようなものであり、関係性そのものが形・存在そのものになっていると齊木さんは言います。

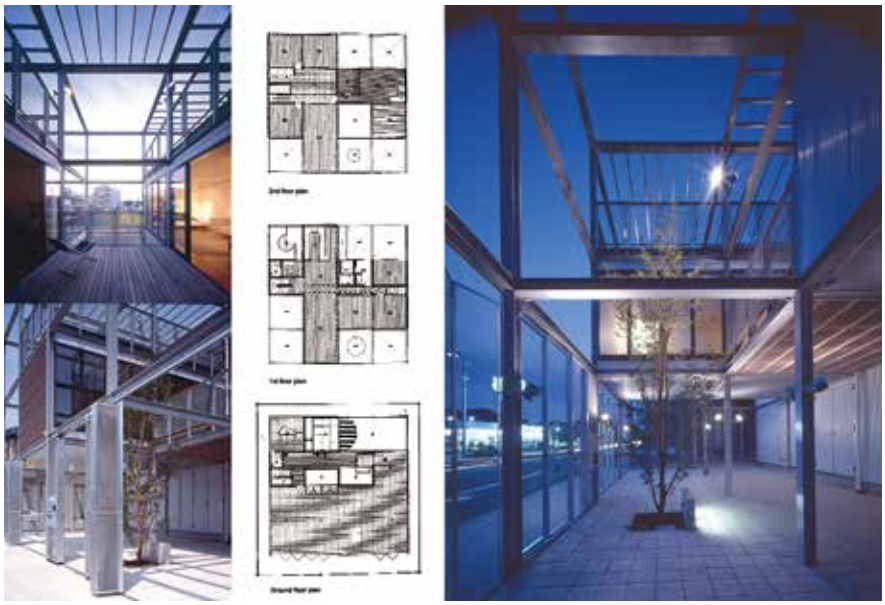
1990年の作品「FRAME」は、スチールのフレームをふと置いてみたら偶然作品になったというもので、関係性を軸に作品を生み出している齊木さんのエピソードとしてとても興味深いものです。齊木さんは、街にあるモノに名前をつけてシールを貼ることで作品化（アートを定義）する試みもされましたが、子どもにアート作品を提案してもらった経験から、専門家の役割は上から目線ではなく市民の考え・発想を受け止めてジャンプアップさせることにある。そう考えることは、変化に適用する都市づくりの可能性につながるのではないか、という興味深い問題提起がありました。

偶然にもお二人の発表では、大阪万博とメタボリズムが共通の話題として提示され、会場からは背景の異なるお二人が、お互いにどう感じられたか質問がでました。須田さんからは「進化する家」について、齊木さんからは「メッカのマスタープラン」があげられ、規模も敷地もまったく異なるが、関係性から考えることは環境の変化への対応を考えることにつながり、そこではモノの本質を問うことになることが強調されました。さらには、関係性を考えるときに時間軸をどのように設定するかが重要な要素であり、仮設から考えることもひとつの有効な手段であることが提示されました。

また、景観や建築のあり方と地域の文脈とにどう折り合いをつけているかについて質問があり、須田さんからはその地域らしいデザインを求められるが、デザイン自体はプリミティブで現代的なものを採用し、そうして構成した環境での人の動き・営みが地域らしさをつくっていくのではないか。齊木さんからは、出身地である川越の町並み保存を例にあげて、地域にはいろんな時代が重層していてそれをどう解釈するか一義ではないこと。ビルバオ・グッゲンハイム美術館やパリのポンピドーセンターを例にあげて、なにかしらのコンテクストをふまえてつくられた建築に対して評価軸はさまざまあり、時間をかけて人や歴史が評価していくのではないか、と回答がありました。

お二人の作品や発言に共通する、関係性から環境をデザインするという姿勢は、環境の集合体である景観についても特定の時間・視点からの見え方だけでなく、時間の経過をふまえてどのように考えるかとともに、市民の参加性をどう取り込んでいくかという意味でたいへん参考になるものでした。

aacaサロンは、新規入会された会員のみなさまを中心に交流の場として、会員増強委員会にて企画しています。第2回サロンでは、入会して初めてお知り合いになったお二人が、共通して関心を持たれている「関係性に働きかける“もの“」について議論が展開され、都市と景観のあり方について話題が広がるものでした。サロンは、気軽に参加できる規模設定としていますので、会員のみなさまがお知り合いにお声がけいただき、サロンの場を活用していただくことで、入会される方が増えることを期待しています。


「進化する家」（撮影：木田勝久）

「結界」（撮影：木田勝久）

FRAME

会場風景

事務局だより

■新入会員・会員の移動　（令和2年7～9月）

個人情報保護法の定めにより、個人会員は氏名・活動分野
法人会員は会社名・担当者氏名・会社住所を記載します。

《会員の異動》

個人会員	石原健也	住所変更	事務所移転の為
	山下治子	住所変更	事務所移転の為
法人会員	㈱日本設計	代表者変更	代表取締役社長 篠﨑　淳（前任　千鳥義典）
	㈱ NTT ファシリテーズ	担当者変更	都市・建築設計部　建築設計部門 佐竹浩二（前任　三浦伸明）
	㈱環境デザイン研究所	担当者変更	総務部部長 仙田　有（前任　佐藤哲士）
	ヒガノ㈱	住所変更	〒 340-0002　草加市青柳 3-14-7

ー 訃　報 ー　心からお悔やみ申し上げます。

井浦　郁夫　会員　6 月 28 日ご逝去　平成 16 年 9 月入会　（有）双真堂表具店　協会員の額縁を多数手掛けられた。
丸山十志郎　会員　10 月 13 日ご逝去　平成 30 年 4 月入会

令和２年度　実施される事業

第 30 回 AACA 賞受賞者紹介のつどい	10 月 27 日（火）18 時～	品川サンゲツショウルーム	会場・オンライン参加
3 連続講演会　「地方創生が生み出す景観」 §1　兵庫県丹波篠山市　美しい国土づくりと地方創生	10 月 20 日（火）18 時～	品川サンゲツショウルーム	会場・オンライン参加
§2　福井県三国町　三國湊の街並み再生	11 月 19 日（木）18 時～		
§3　山形県金山町　三人の建築家によるまちづくり	12 月 14 日（月）18 時～		
景観シンポジウム　地域とデザイン（予定）	2 月 18 日（木）18 時～	梓設計 AZS ホール	会場･オンライン参加（予定）
第 30 回 AACA 賞受賞式	12 月　9 日（水）18 時～	建築会館第ホール	会場・オンライン参加

令和２年度　コロナ感染防止のため中止される事業

- 令和 2 年度設立記念会
- 景観シンポジウム
- 街に飛び出す作品展
- BOX 展
- 芦原義信記念杯（春・秋）
- 役員・委員会・新入会員交流会（夏）

令和２年度　コロナ感染防止のため開催未定の事業

- 第 197 回 aaca フォーラム
- 第 15 回 aaca 建物視察会

編集後記

新型コロナウイルスの感染拡大による非常事態宣言が発令されて以降、協会開催事業も次々と中止・延期となるなど協会の活動も休止してしまい､残念ながら会報の夏号（7 月発行）も発行できなくなってしまいました。会員の皆様には、深くお詫び申し上げます。

会報 88 号では、このような状況の中、多くの執筆者の方々のご協力をいただき発行することができましたこと、執筆者の皆様には感謝申し上げます。新しく入会された会員の皆様にご執筆いただき、新入会の法人会員の皆様にもご執筆いただきました。また、藤井厚二設計による木造モダニズム建築「聴竹居」の保存・公開活動を長年続けられてきた松隈章氏に連載をお願いしました。

自粛生活が長引く中、会員の皆様の原稿をお楽しみいただければと思います。　（飯田郷介）

aaca 2020.11 no.88

発行人　会長 岡本 賢
発　行　一般社団法人 日本建築美術工芸協会
〒 108-0014
東京都港区芝 5-26-20　建築会館 6 階
TEL　03-3457-7998　FAX　03-3457-1598
URL　http://www.aacajp.com
E-Mail　info@aacajp.com

編　集　広報委員会
委員長　飯田郷介
副委員長　野口真理　田島一宏
委員　五十嵐通代　石田眞人　置鮎早智枝
工藤康博　竹生田 正　中村弘子
松本治子　三上紀子　森田高年
山﨑和子　山崎輝子　山下治子
吉田　誠
編集制作協力　株式会社 アム・プロモーション